

受けたことが強く印象に残っています。元来トラック島は海が近くて潮風が十分なせい、シラミはいなかったが、その代わりに南京虫がおりました。海水でよく水浴が出来たためか、シラミのことはよかったです。南京虫も少しはいたが、幸い私の皮膚は虫に抵抗力があつて助かりました。

最後に最も思い出の深いことといえば、やはりトラック島での空腹の問題です。特に十九年六月頃より二十年三月頃までがひどくて、餓死者が出て、海軍の軍属が沢山亡くなりました。食料が不自由になるに従い、イモの葉を食べました。井戸の真水で葉を煮て、オシタシで食べたり、また葉と茎を細かく切り、イモに入れたりでした。今考えても「よくぞまあ、あの厳しい米軍の猛爆に耐えて生き延びたことよ、よくぞまあ空腹に負けずと健康を保って生き残ったことよ」と、感無量です。

私は漁撈隊に入り、魚を採っては天日で干し、塩漬けにして保存したり、椰子の実を利用した椰子酒に恵まれたりしたおかげで、他の人に比べて格段の差で食

料に恵まれて、元気で帰ることが出来ました。

しかし、同じ島にいた日本人同志の中には餓死した者も多いので、心より相済まぬ気持ちで一杯です。深くご冥福を祈るばかりです。人間どうせ死ぬなら、敵と戦って名譽の戦死をし、手柄を立て、勲章を貰うような勇ましい死に方が理想ですが、栄養失調の餓死とは戦争指導者の作戦方法や兵力の運用の優秀に、疑問を抱くのは私ばかりではないでしょう。

終わりに臨み、世界平和、人類の幸福を強く念じて、悲惨な戦争をしないよう祈ります。

補給なき孤島セラム

茨城県 川田 一櫻

川田さんは現役で近衛歩兵第一連隊へ入られたそうですが、再召集は何処でしたか。

私は大正八年十月一日生れ、昭和十五年一月十日、近歩第一連隊へ入営、九段上の今の武道館のある所で

す。禁闕護衛が近衛兵の任務でしたので、十七年十一月三十日除隊まで内地勤務でした。

大東亜戦の戦局がだんだん悪くなった十八年十月五日、水戸の東部第三十七部隊（第二連隊の補充隊）へ充員召集されました。部隊の古い下士官が転属するので、教育係下士官として入隊したわけです。ところが、後から後から充員召集兵が来るので、結局は通信隊要員となったのです。

その後、第二飛行場設定隊が新しく編成されたので豊橋へ行き、哨舎のような所で訓練をして、十九年一月十日頃、広島出帆、台湾の高雄へ寄港して無事にフィリピンのマニラへ入港。約三ヵ月間、そこで他の飛行場設定隊の協力をしていた。

マニラからアンボン島（セラム島の南）へ向け出港し、途中雷撃を受けたが無事にアンボンの町へ辿り着き、そこに二〜三ヵ月駐留していた。

それから北側にあるセラム島に上陸し、飛行場の建設にかかった。まず、飛行機の格納庫造りだが、平地に堤防を築き防空壕のようにして、その中へ飛行機を

入れる。その時設定隊はあらゆる土木機械を持って行ったが、ブルドーザーなどが多かった。トラックで土を輸送した。

滑走路は舗装していない。模型（擬）飛行機を置いて空襲の時、敵機の目を滑走路からそらした。爆撃・銃撃は毎日のようにあり、双胴のP38が多かった。こちらは高射砲は無し、あるのは九九式小銃ぐらいだったので、どうしようもない。裸同然で抵抗も出来なかった。

Deng熱にかかり、マニラへ行った時、マニラ港は夜間燈を煌々とつけて、陸揚げしていた。米も物資も多く、ここにいたいと思ったぐらいだったが、半年後には主戦場となったのだから運というのは判らないのです。

― 飛行場設定隊というのはどういう編成なのか。

隊長は少佐で、大隊編成、三個中隊、一個中隊は三個小隊、分隊員は十二人で四個分隊で一個小隊でした。兵隊はほとんど召集者で、補充兵、年配者が多く、子

供が十歳とか十二歳とかいう者も来ていた。現役経験者は少なくて半数ぐらいしかいなかった。

我々の部隊は、セラム島からニューギニアへ行く予定だったが、護衛艦も輸送船も無い、飛行機の援護も出来ぬというので、止むを得ずセラム島にいたわけです。もし、ニューギニアへ出港していたら途中必ず撃沈されたでしょう。これも運でした。

―予定外のセラム島駐留というのでは、どうやって自活したのですか。

食糧無し、補給無しということ、茅の野原を先ず開墾して、芋・なす・胡瓜・南瓜を植えて主食にした。米は一日一回おかゆ、芋の葉と野草（作業の往復に採集）が副食で、塩は海水を煮て作った。製塩班を編成し専門に製塩させた。ドラム缶を半分に切り、かまどを築いて、海水を入れて焚いたがニガイイというので、椰子の果汁を入れてニガリを取った。

栄養不良になるので、中隊ごとの漁労班と大隊の狩猟班を編成し、動物性蛋白質を取るようになった。我々に対する補給は上陸後無いので、衣服も靴も持って来

たままだったので、原住民と物々交換した。沈没した時海の中で鮫を予防するため晒の布など持っていたので貴重な交換物資となりました。セラム島は旧蘭領だったが原住民は日本人に従順だった。

―空襲は激しかったが、上陸はして来なかったのですか、終戦後の生活はどうでしたか。

爆撃・銃撃は毎日だったが、連合軍の攻撃は他に向けられ、我々のセラムは釘付け、置き去りにされたわけです。しかし、何時上陸するか、艦砲射撃されるか、防禦準備の明け暮れですから、食糧不足ばかりではない精神的緊張の連続です。心身共に困苦欠乏に耐える毎日でした。

終戦は一日ぐら以後に判ったが、それまでは謀略だといっていた。部隊は濠北派遣軍に属していたが、終戦後は兵補（補助の兵として教育をした現地インドネシア人）がオランダ軍人に代って、こちらは逆にいじめられるようになった。武装解除の時はオランダ軍がやって来た。武器は全部接收され、蘭軍はそれを海の中へ捨てた。その後、我々は一個所に収容されて復員

を待つことになったのです。

収容所は椰子の葉で屋根を葺いていた兵舎（何所かの部隊の）をそのまま利用して抑留生活に入ったのです。病気はマラリヤ、栄養失調、脚気だが、それを併発させるとなかなか助からなかった。赤痢患者も随分いた。軍医は見習士官で経験不足なので、時によると衛生兵の方が頼りになったこともあった。水は井戸を掘って使ったが生水を飲むと、赤痢などになるので必ず煮沸して飲むようにした。

終戦前、オランダの船が近付いて来たので上陸するのかと思つたが、結局は終戦なので様子を見に来たらしかった。抑留中、監視のオランダ兵が見廻っていて殴られたりしたが、なすがままだった。金めの物は全部取られた。時計・万年筆等も巻き上げられた。しかし、私の中隊の伍長だが、人間が円満な人だったので兵補を可愛がつっていた。そのため兵補が他から巻き上げた物を逆に伍長の所に持つて来たということもあった。良くしてやれば、良くかえってくる。何処でも何時でもこれは同じだ。

思えば、内地出發が十九年一月、セラム上陸が十九年八月で、内地復員が二十一年六月だから、抑留は終戦から十ヵ月間ということです。

船はフリゲート（米）艦で、来る時はセラムまでは随分長かったが、帰りは一週間だった。抑留中は労働が無かつたので、体操などをしながら健康の回復をはかりました。食物は支給され、野菜は自活、貯蔵食料は万一を考えて（孤立していたし、何年収容されるかわらぬ）残しておき、長く食べるよう節約していた。病気にさえならねば何とか生きていけた。

結局は、連合軍が上陸せず、跳び石伝いに本土へ向けて進んでいったので、病気や栄養失調での病死者はあつたが、空爆での戦傷死者も、ニューギニア、パオ、ペリリウ、アンガウルなど、第十四師団系統の郷土部隊と比較すると少なかった。私たちも、水戸編成部隊だったので、現在でも戦友会は続けている。友人、知人の戦没者多い中で、現在あることは幸せであり、亡き戦友のご冥福を常に祈っています。